

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 4 日現在

機関番号：34506
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2009～2012
 課題番号：21730575
 研究課題名（和文） アタッチメント理論に基づく乳幼児—養育者関係支援プログラム開発のための基礎的研究
 研究課題名（英文） A fundamental study on developing intervention program to support infant-parent relationship based on attachment theory
 研究代表者
 北川 恵 (KITAGAWA MEGUMI)
 甲南大学・文学部・教授
 研究者番号：90309360

研究成果の概要（和文）：アメリカで開発され、アタッチメント改善効果が実証されている the Circle of Security (COS) プログラムを、開発者（Bert Powell）による助言を受けながら、日本の親子 8 組に実施した。介入前後、半年後のアセスメント（SSP など）により、本プログラムが日本人親子にも有用であることを認めた。また、心理教育 DVD を用いた COS Parenting (COSP) プログラムの日本語版を作成し、2 組の親子に実施し肯定的変化を認めた。日本文化に応じた心理教育の工夫が今後の課題となった。

研究成果の概要（英文）：The Circle of Security (COS) program, developed in US and proved to improve attachment, was conducted to 8 Japanese dyads with supervision by one of the originator, Bert Powell. It was found that COS program was effective to Japanese dyads, through the pre, post and 6-months-after intervention assessments using SSP. Then, COS parenting program with psycho-education DVD was translated into Japanese, and was conducted to 2 Japanese dyads. It was found that this program is also effective and further discussion was needed to adjust the psycho-education into Japanese culture.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	217,412	65,224	282,636
2010年度	882,588	264,776	1,147,364
2011年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：アタッチメント、心理学的介入、親子関係、Circle of Security

1. 研究開始当初の背景

(1) 発達心理学を中心として蓄積された研究知見により、発達早期に養育者と健全なアタッチメントを形成することが、個人のその後の発達やメンタルヘルスに長期的で重大な影響をもつことが明らかとなった。そこで、予防的介入や早期介入として、幼い子どもと養育者の関係性支援の必要性が注目され、た

とえばアメリカではヘッドスタート計画などハイリスク家庭への支援が展開した。しかしながら、多数開発された介入プログラムはエビデンスに基づかないものが多く、科学的根拠に基づき、かつ、効果が検証されているプログラム開発の必要性が提唱された。なかでも、アメリカで開発された the Circle of Security program (以下、COS プログラム)

(Cooper et al., 2005) は、行動レベル（心理教育とビデオ振り返りにより、適切な養育行動について学ぶ）と表象レベル（養育者の不安に治療者が寄り添い、養育者の傷つきを心理的に解決する）の両方を取り入れ、20セッション（5～6か月）という短期間で、子どものアタッチメントが改善することが実証されている。欧米の乳幼児精神保健などでもっとも注目されている親子関係支援プログラムであった。

(2) 日本でも、子育て不安・困難への対応や、虐待予防・再発防止の観点から、親子関係支援が様々に模索されているが、アタッチメントに焦点づけた介入プログラムは開発されていない。日本においても、アタッチメント理論に基づきエビデンスを伴う親子関係支援プログラムの開発が必要である。COSプログラムを日本で実施し、効果を検証し、日本の実践現場に還元することが必要と考えた。

2. 研究の目的

(1) アメリカで開発され、アタッチメント改善効果が実証されている COS プログラムを日本で初めて実施する。研究代表者は 2007 年にアメリカで開催された COS プログラム実施資格のための研修に参加しており、その後の必要な訓練（アセスメントの信頼性テストへの合格、開発者によるスーパービジョンを受けながら 2 グループ実施すること）を成し遂げ、日本の親子に実施する。

(2) ついで、日本文化や実践現場の特徴に応じて必要な修正を加え、日本の実践に広く提供しうるプログラムを開発する。

(3) 最後に、介入効果を検証する。プログラムの効果は、親子相互作用観察（行動レベル）と親へのインタビュー（表象レベル）とから検証する。あわせて、研究代表者が開発しているアタッチメント投影法（Pictures of Attachment Related Situations、以下 PARS）を用いることで、多面的なアセスメントを行うと同時に、PARS の妥当性についても検討する。

3. 研究の方法

(1) 研究対象者（プログラム参加者）募集の手続きと内訳

「子どもとの関係を見つめなおしたい」という動機をもつ地域の親子を募集した。平成 21 年度は、関係機関からの紹介を受けた夫婦 1 組とその子ども（8 歳男児）を対象とした。平成 22 年度は、地域で子育て中の親への講座（子育て応援講座）を開催してアタッチメントの視点を伝え、COS プログラムの趣旨と内容をよく理解した親子 4 組が参加を希望した。2 組はそれぞれの事情に応じて個別に対応した。残る 2 組を COS プログラムの対象者

とした（男児 2 名：介入前 1 歳 9 か月～2 歳 4 か月）。平成 23 年度は、地域の支援者向けの講座（スキルアップ講座）も開催し、その後親向けの講座も行って、参加者を募集した。5 組が参加を希望し、5 組全員がプログラムを完了した（男児 2 名、女児 3 名：介入前 1 歳 6 か月～3 歳 3 か月）。以上の 8 組が、COS プログラムの参加者であった。

また、平成 24 年度も同様の手続きで募集し、3 組が参加を希望し、うち 1 組は途中で転居した。残る 2 組を対象に、COSP プログラムと、COS プログラムを応用したビデオ振り返りセッションとを実施した（女児 2 名：介入前 1 歳 0 か月～1 歳 5 か月）。

(2) プログラムについて

① COS プログラム

平成 21～23 年度は、Bert Powell 氏の助言を受けながら、COS プログラムの実施手順に沿い、心理教育とビデオ振り返りからなる介入を行った。毎週の頻度で、1 回 75 分のセッションを、参加人数に応じて、8 回（1 組）から 18 回（5 組）行った。

② COSP プログラム

平成 24 年度は、習得と実施が比較的容易な、心理教育を中心とする COSP プログラムの日本語版を作成し、毎週の頻度で、1 回 75 分、全 8 回の内容を実施した。その後、COS プログラムを応用したビデオ振り返りセッションを 2 回実施した。

(3) 効果の検証

介入前、介入後、（平成 22 年度参加者からは）介入終了半年後に、以下のアセスメントを実施した。

① 親子相互作用の観察（変形 Strange Situation Procedure、以下変形 SSP）

通常の 8 場面、絵本場面と片付け場面を追加したもの。安心感の輪（図 1）に照らして、親子相互作用の強みと問題を特定する。

② 親へのインタビュー（COS Interview、以下 COSI）

変形 SSP へのリアクション、子ども表象、アタッチメント表象についての質問からなる。子どもからの特定の欲求に応えにくい親の背景（傷つきや防衛）を仮説的に理解すると同時に、内省機能の程度なども評価する。

③ アタッチメント投影法（PARS）

アタッチメントが活性化される日常的な場面の刺激画（4 場面）を提示し、刺激画中の親子の気持ちや話の続きを自由に答えてもらう。子どもの欲求表出、親の応答、関係性を通してストレスが解決される見通しについて評定する。

④ その他、アタッチメント行動チェックリスト（Attachment Behavior Checklist; ABCL）や内省機能質問紙（Parental

Reflective Function Questionnaire; PRFQ) を用いた。

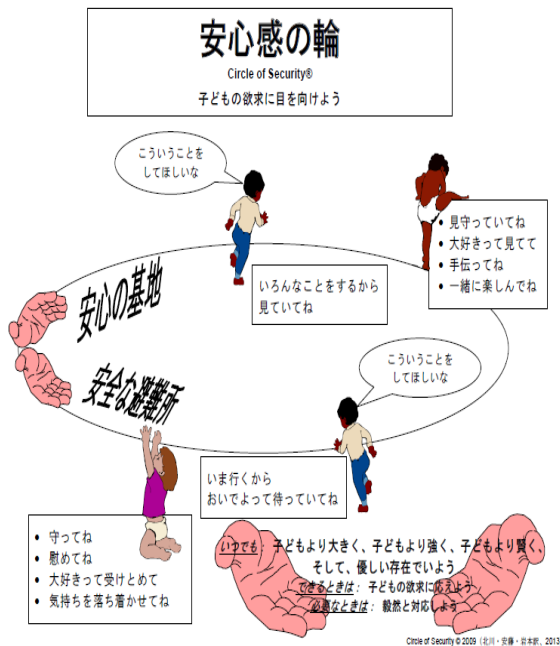


図 1. 安心感の輪

4. 研究成果

(1) 平成 21 年度の結果

平成 21 年度は、8 歳男児との関係に悩む夫婦 1 組を対象に実施した。その結果、子どもの問題行動のとらえ方が受容的で共感的になる変化が認められた。たとえば、「暴言を吐く子どもは、親を親とも思っていない」というとらえ方から、「子どもはどのような気持ちでも乱暴に表しているだけで、本当は、親の手助けを求めている」という理解にいたった。COS プログラムが欧米だけでなく日本の家族においても、また乳幼児だけでなく児童期にも有効であることが示された。

(2) 平成 22～23 年度の結果

サンプル数が少ないため、統計的な分析ではなく、事例に即した検討を行った。

① 変形 SSP

どの参加者も、介入後は介入前より、子どもは率直にアタッチメント欲求を表出するようになり、親の応答性も高まった。介入終了半年後も肯定的変化が持続していた。

たとえば、ある子どもは介入前の SSP において、分離中に待ちわびていた母親が部屋に戻ると、母親に背を向けて部屋の奥に走り（回避行動）、そのまま動きが止まった（フリーズのような状態）。その後、気持ちが落ち着かないまま問題行動を繰り返し、たしなめる母親に大声を出した。ビデオ振り返りに

において、母親は子どもの本当の欲求（落ち着かせてほしい）と、それを率直に表しにくくなっていること、その結果としての行動化であることに気づいた。介入後の SSP では、子どもは戻ってきた母親に泣きながらしがみついた（率直な欲求表出）。母親は子どもが十分に落ち着くまで慰めを提供できた（応答性の高まり）。介入終了半年後、母親が子どもに退室することを伝えると、子どもは母親に「早く帰ってきてね」と伝えて分離を受け入れ、再会した母親を歓迎し、すぐに落ち着きを取り戻した。子どもは母親の応答性を信頼できるようになっており、分離が始まる前から率直なコミュニケーションができるようになったと考察した。

② COSI

COSI は介入前後に実施した。自省機能の問題は、「気持ちに関心を向けられないこと」と「気持ちの読み取りが歪んでいること」の 2 通りの現れ方をする。そこで、介入前後のインタビュー逐語記録から、「気持ちについての言及頻度」と、「気持ちの読み取りの適切性」を評価した。その結果、介入後は介入前より、「気持ちについての言及頻度」が増加していること（インタビュー項目数のうち、気持ちへの言及がある項目数の割合の平均値；介入前 0.42、介入後 0.49）、「気持ちの読み取りの適切性」がどの事例においても増していること（介入前「（ウンチをしたオムツをかえるとき）ニヤッと触りに来る」といった悪意の読み取り、介入後「子どもなりに一生懸命にしていることが私の意に反するとき」といった子どもの視点に立った読み取り、など）が認められた。

③ PARS

介入前後の変形 SSP で認められた親子相互作用の肯定的変化と連動する変化が、PARS においても確かめられた。子どもの欲求や気持ちへの理解と応答性の高まり、子どもの不安に対応できる親としての効力感の高まりが特徴的であった。たとえば、ある親は、介入前の PARS で親子がぶつかり続けて途方にくれるという物語を作成した。介入後は、同じように親子がぶつかっている場面でも、子どもが母を呼び（子どもからの率直な欲求表出）、母は子どものもとに戻り（応答）、二人で話をした後手をつないで歩く（関係性を通したストレス解決）といった物語になった。変形 SSP では、母親から子どもに手を差し伸べる行動が増えており、慰めの提供といった変化が、行動レベルでも投影法レベルでも認められた。

④ ABCL、PRFQ

これらの質問紙においては、サンプル数の

不足により統計的な検定ができないため、介入前後の差についての言及はできない。また、たとえば PRFQ では「子どもの気持ちがわかる」といった質問項目があるが、たとえば歪んだ読み取りをしていた親がプログラム参加を通して、自身の受け取りの歪みに気づいた結果、「子どもの気持ちは簡単にはわからない」と思うようになり、介入後に評定値が下がった事例があった。そのため、質問紙については、妥当性の検討も含め、サンプル数を増やしながらか検討を継続する必要がある。

(3) 平成 24 年度の結果

平成 23 年度までの研究成果により、COS プログラムが日本の親子にもアタッチメント改善に効果があることが認められた。一方で、COS プログラムは習得と実施のコストが高く、地域の親子関係支援の実践現場に還元するには、もう少し簡便な方法にする必要があった。特にビデオ振り返りセッションのために、親子をビデオ撮影し(変形 SSP)、介入目標を設定し、目標に応じたビデオ場面を選択編集するビデオ振り返りセッションが、親へのインパクトは大きいものの、実施のコストが高かった。COS プログラム開発者も同じ理由から、アタッチメントの視点をわかりやすく親に伝える心理教育 DVD を作成し、その DVD を視聴しながら参加者と内省的対話を行う COSP プログラムを開発した。平成 24 年度は、心理教育 DVD の日本語版を作成し、2 組の親子に実施した。また、ビデオ振り返りセッションを追加することで、COSP プログラムだけによる効果と、ビデオ振り返りも含めた効果についても検討を試みた。

その結果、心理教育 DVD を用いた COSP プログラムだけでも、介入前後の SSP における親子相互作用に肯定的変化が認められた。

引き続き、この手続き(COSP プログラム全 8 回+ビデオ振り返りセッションの追加)で自験例を増やし、介入前、COSP 後、介入後、介入終了半年後のアセスメントを行うことで、介入がどの時点でどういった効果をもたらすのかについて検討を続けることが今後の課題であると考えた。また、心理教育 DVD に含まれている内容については、日本文化における育児の通説(たとえば、抱っこをすると抱き癖がつく、など)をアタッチメントの視点から再検討する(子どものアタッチメント欲求に応えることで、子どもは感情を整える力を発達的に獲得すると捉えなおすこと、など)、文化に即した修正についての検討が今後の課題であると考えた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

- ① 北川恵、親子の関係性の焦点づけた評価と支援を提供するプログラム：The Circle of Security プログラムの特徴と実践、子どもの虐待とネグレクト、査読有、14(2)、2012、153-161
- ② 北川恵、アタッチメントの記憶と臨床、森茂起(編著)甲南大学人間科学研究所叢書 心の危機と臨床の知 15 自伝的記憶と心理臨床、平凡社、査読無、2012、pp.166-189
- ③ 北川恵、健全な分離を可能にするアタッチメントとは、高石恭子(編著)甲南大学人間科学研究所叢書 心の危機と臨床の知 13 子別れのための子育て、平凡社、査読無、2012、pp.83-100

〔学会発表〕(計 17 件)

- ① 北川恵・岩本沙耶佳、The Circle of Security program に参加した母親の内省機能の変化、日本教育心理学会、2012 年 11 月 25 日、琉球大学
- ② 北川恵、The Circle of Security program に参加した母親のアタッチメント表象の変化、日本心理臨床学会、2012 年 9 月 15 日、愛知学院大学
- ③ Megumi Kitagawa、The Circle of Security Intervention to Japanese mothers and effect evaluation by use of the modified Strange Situation, the COS Interview, and the projective method to assess attachment representation, 5th International Attachment Conference、2011 年 8 月 21 日、Oslo, Norway

〔図書〕(計 1 件)

- ① 数井みゆき、北川恵、他、誠信書房、アタッチメントの実践と応用、2012、22-43

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北川 恵 (KITAGAWA MEGUMI)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：90309360